0035 ハバクク書　要約付き

ハバククは南ユダ王国 の最後の何十年かを生きました
がそれは不正と偶像礼拝の時代 でした
彼はバビロンの台頭という迫り くる脅威を見て
これは大問題だと察知しました しかし他の預言者と違ってハバク
クはイスラエルを非難せず 神のために民に語ることさえしませんでした
彼の言葉はむしろ神に対する個人 的なもので
この書には世界に悪と悲劇がは びこる時に
それでも神は良い方だと信じよう とする
彼の葛藤の過程が綴られています そのためハバクク書は嘆きの詩
であり 詩篇に収められている嘆きの詩
とも似通っています ハバククは神に不平を述べこの
世界の苦しみや不正に 目を向けてどうにかしてくれと
要求しています この嘆きの詩のスタイルを知る
ことが この短い書の構成とメッセージ
を理解する上で鍵となります 1 章と 2 章の内容はハバククと神の
論争で ハバククは 2 つの不満をぶつけ神は
それに 2 つの返答をします 一つ目の不満はイスラエルの生活
はひどいものになった ということです
トーラーは打ち捨てられその結果 暴力と不正が蔓延しているのに
堕落した指導者たちは見て見ぬ ふりでした
ハバククは神にどうにかしてくれ と懇願しましたが
何も変わったようには見えません しかし突然神からの応答があり
神はイスラエルの民の堕落を知って いて
彼らに裁きを下すためにバビロン の軍隊を呼び寄せている
と言います そしてミカやイザヤのメッセージ
と同様に イスラエルの不正と悪のゆえに
この恐ろしいバビロン帝国にイスラエル を滅ぼさせると言いました
しかしハバククはこの答えに不服 でした
そこで 2 つ目の不満をぶつけるの です
バビロンはイスラエルより悪い ではないですか
もっと堕落していてもっと暴力 的で
自分の軍事力を神の力のように 思い人間を動物扱いし
魚を網で引き上げる様に人を捕 えています
彼らは自分の帝国を築くために 国々と人々を貪り食っています

聖くまた良い方である神よあなたは どうしてそんな堕落した
国を歴史を動かす道具として使う のですかと問い詰めます
彼は自分を物見やぐらに立って 神の答えを待つ者にたとえています
そして神は返答しました 神はハバククに板とのみを使って
見たことと聞いたことを書き記 すようにと言いました
それは将来やってくる定めの時 についての幻で
来るのが遅いと思うことがあっても 必ず来るものです
神は正しい人はこの希望と幻を 信じることによって生きると言い
ました ではハバククが書き留めるべき
神の約束とは何でしょうか それは神はバビロンを滅ぼすということ
でした 暴力と抑圧で他国を制する国は
復讐の連鎖を生み出し 神はその連鎖を用いて
国々を台頭させたり滅ぼしたり するというのです
つまり神はバビロンのように堕落 した国を一定期間用いたとして
も彼らのやることをすべて認めて いるわけではありませんでした
神はすべての国にご自身の正義 を行使されるので
バビロンも同じことをする他の 国々と同様倒されるのです
この後抑圧と不正に満ちたバビロン のような国々を描く
5 つのわざわいの中で神の約束の 詳細が述べられていきます
最初の 2 つは裕福な者たちが 貧しい人々を借金づけにしておく
ために法外な利子を取って 自分たちの富を築くような経済
的な不正に焦点を当てています 3 つめは奴隷を動物のように扱い
暴力で脅しながら働かせること への批判です
4 つ目は酒におぼれる無責任な指導者 が民を苦しめながら
どんちゃん騒ぎをしてセックス と酒のために
金を浪費していることの告発です そして最後は
そのような国々の悪事の原動力 となっている偶像礼拝を暴いて
います彼らは金や力や軍事力を 偶像とし
あらゆる犠牲を払いながらこれ に忠誠を誓ったのです
そのため民は国家の奴隷のよう になっていました
ここに描かれている有様はバビロン に限ったことではありません
人間の性質を考えればすべての国 が
最終的にはバビロンのようになってしまう ということを表す一例ですその
意味でハバククに対する神の答え は
後のすべての時代において バビロンのような国に支配される
人々への答えにもなるのです ここで一つの疑問が残ります

神はバビロンのような帝国を興 し
没落させるというパターンを永遠に 繰り返されるのでしょうか
その答えは 3 章にあります ハバククは祈りの中で以前そう
したように 堕落した国を滅ぼしてください
と懇願しています そして続く詩の中でまず
力に満ちた恐ろしい神の登場を 描いています
この詩はミカ書とナホム書の冒頭 の詩に似ていて
出エジプト記のシナイ山における 神の姿に似ています
雲が立ち込め炎が見え地震が起 こり
そこに創造主が現れて人の悪と 対決し
すべての人の目を引きつけるの です
ハバククはやがて悪が打ち負か されることを
未来の出エジプトとして描いて います
神は戦士としてファラオとの闘 いに赴き海を割った時のように
もう一度悪人の家の頭の上に裁き を下すというのです
ここでファラオは バビロンのような暴力的な国の原
型になっています 同時に神が悪と対決する時に
ご自分の民と油注がれた者を救う と語っています
これはダビデの子孫の王について の記述です
つまりこの詩において過去の出 エジプト記の物語は
将来神が行われる 新しい出エジプトを投影するもの
になっているのです 神は再び悪を打ち負かしこの世
のファラオとバビロンを滅ぼします そしてすべての民に正義をもたらし
抑圧されていた人々を救い出します そのためハバククは希望に満ち
た賛美で この書を締めくくることができ
たのです たとえこの世界が食糧不足や干
ばつや戦争などで崩壊しそうでも 自分は神が約束してくださった
契約を信頼しそのゆえに喜ぶと このようにハバククはこの書の終わり
で 信仰によって生きる正しい人の
輝かしい見本となっています ハバククはこの人間の世界がどれ
ほど暗く 混乱したものになりうるかを知って
いました その上で神は私たち以上にこの世界
を愛し いつかこの悪に決着をつけてくだ
さることを信じようと 読者を信仰の旅へといざなっている
のですこれがハバクク書です

500 字要約

『ハバクク書』は南ユダ王国の終末期に生きた預言者ハバククによって記された文書である。この時代は不正と偶像礼拝がはびこり、バビロンの台頭が迫る脅威となっていた。ハバククは他の預言者とは異なり、イスラエルを非難することなく、自身の葛藤と信仰に焦点を置いた。

ハバクク書は、個人的な信仰と神への対話が中心であり、世界の悪や悲劇に直面した時にも神の善を信じる姿勢を描く。彼の疑問や不平、神への熱望が、嘆きの詩として表現されている。ハバククと神との論争は、2 つの異なる視点を提示する。1 つ目は、ハバククがイスラエルの不正と堕落を問題視するものであり、2 つ目は、バビロンの更なる悪について疑問を呈するものである。

神の答えによれば、バビロンはイスラエルを凌駕するほどの悪であり、神はバビロンを用いて正義を行使すると語る。書の中では、経済的な不正や暴力、偶像礼拝による悪が描かれ、これがバビロンに限ったことでなく、全ての国々が同様な道をたどる可能性を示唆している。しかし、神の約束は堕落した国々を滅ぼすと同時に、正しい者たちに希望と生きる力をもたらすものである。

ハバクク書は、神が再び悪を打ち負かし、抑圧された者たちを救う出エジプトのような出来事を描いて結ばれている。この書は、ハバククの信仰と希望、神の正義と救いに関する洞察を通じて、読者に信仰の旅への誘いを与える。この文書は、暗闇の中でも神の約束を信じ、希望を持って生きる正しい人の模範としてのハバククの姿勢を称賛して結ばれている。